

シベリア抑留を振り返って

長野原 千葉 貫 一

大正九（一九二〇）年、上伊那郡美篤村に生まれる。

昭和十（一九三五）年、美篤小学校高等科卒業。

小学校卒業以来、家業の農業に従事する。

昭和十五年、徴兵検査の結果第一乙種合格。

昭和十六年八月、教育召集により金沢第五十五連隊

に入隊、軍事教育を受ける。

昭和十六年十一月、教育召集解除となる。

同年十二月十日、臨時召集により金沢第五十二部隊

山砲隊に入隊。

昭和十七年九月、召集解除により帰郷する。

昭和十七年十一月、第十一次永和三峯郷開拓団に入

植、開拓に従事。

昭和二十年七月二十日、臨時召集により嫩江第十二

遊撃隊に入隊す。八月十日ハルビン満鉄総局配属となる。

八月十五日、ここで終戦を迎え武装解除を受ける。

八月二十日、列車で牡丹江に移動。ここで列車を降り五、六日歩いて弾薬庫に入り一週間を過ごし、その後さらに行軍に行軍を続け、シベリアのアルチョムに着いたのは冬も間近に迫った九月二十七日のことだったと思う。

ここアルチョムの収容所は以前ドイツ兵の収容所であり、当時まだドイツ兵が少しばかり残っていた。この収容所は炭鉱の収容所であり、仕事は主として石炭の坑道掘りであった。一日二十四時間三交代で掘り続ける。おまけに休日はない。ロシア人の監督は作業量を重視、ノルマを強要する。

しかし食糧は人間が食べるとは思わなかったフスマのお粥のほかは何もなく、体力は弱るばかり、ノルマ達成どころか栄養失調による犠牲者が続出。

また昭和二十一年十二月の炭鉱爆発の発生により十五人程が被爆、また落盤事故等により二十人以上の尊

い生命が失われるなど最悪の事態が続く。

何の望みも楽しみもない、ただ願うは一日も早く日本に帰りたい、これが唯一の夢だった。こんなとき、日本兵の手によって風呂が造られ、週に一回位の入浴ができるようになった。身も心も疲れきっていた時だけに入浴によりわずかながらも心休まり、ささやかな憩いの場となった。

私は馬舎当番六人の中選ばれ、馬八頭、牛六頭に豚等の飼育に当たることになった。この仕事は六人で十二時間交代、休みなしの決して楽な仕事ではなかった。しかし空腹に堪えがたい時には馬糧や豚の餌を食べて空腹をしのぎ、栄養失調から身を守ることができた。

やがてシベリアに四度目の冬が近づく九月、待ちに待った帰国の時が来て列車に乗る。

振り返ってみれば、この収容所に収容された時に千人の部隊であった。皆日本に帰る日を夢見てお互いに励まし合って来たのに、栄養失調、重労働等に耐えきれずに、また事故等により帰国の夢ははかなく消え去

り、凍土シベリアに眠る二百余人の友を残して行くのは残念だが仕方ない。

やがて列車はウラジオに向けて発車、今は亡き友の冥福を祈って両手を合わせ、アルチョムを後にする。

しばらくして列車はウラジオに到着。四、五日してナホトカに着き、船を待つ。しばらく待つうち、引揚船興安丸が入港する。この船に乗船。

長かったシベリア抑留から解放されて舞鶴に入港。

各種手続終了後、懐かしい我が家に帰ったのは昭和二十三年十一月二十四日。

帰国後、有線の電気工事、積水化学関連工場に勤務し、無事定年退職し現在に至る。

シベリアの思い出

長野県 横内 弥六郎

大正九（一九二〇）年四月十六日、長野県諏訪郡川岸村に生まれる。